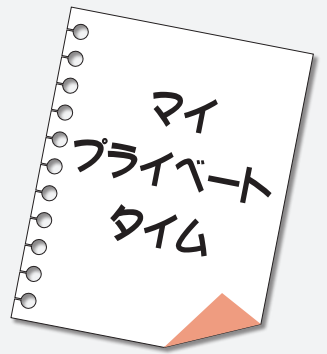


心は少年



あわじ 淡路市長(兵庫県) **門 康彦**
かど やすひこ
Yasuhiko Kado

帰郷

平成11年3月31日、市町村総数3232。平成22年1727。言われるところの平成の大合併。平成25年には1719。差引1513の市町村が消えた事になります。

行財政基盤の強化と地方分権推進などが主な目的ですが、現場の市町村から分りやすく見ると、効率化にすべて集約されます。

新しくできた市町のうち、5市町村以上が合併したのが119。兵庫県では4。

そのうち、市と合併したものを除けば2。淡路

市5町と丹波市

6町。数だけで

はそう特別でな

いように思われ

ますが、決定的

な違いは地形。

淡路市は、播磨

灘と大阪湾に面

し漁業農業が隣

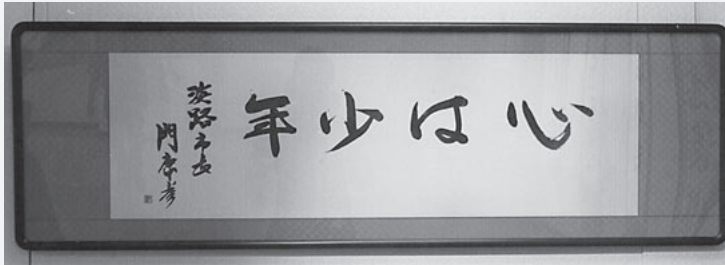
接し、中央は丘

陵で分断されて

5万人足らずの

人口は5カ所に

散在し、市街地



直筆の書「心は少年」

を形成していません。

その上、マイナス要因として、19年前の阪神淡路大震災のダメージが、県内一厳しい財政状況でした。

私に、合併5町の初代市長として地元の要請があったのは、淡路県民局長から転勤し、県の代表監査委員として勤めていた時でした。

「どの地域から出ても上手くないかない。行政を知り尽くした、半分よそ者のお前が、今は適任。お前しかいない。頼む」友人達の言葉を背に、お世話になった前兵庫県知事貝原俊民氏を訪ねました。

「君は財政課出身、なぜ、あえて火中の栗を拾うんだ？」優しい言葉を掛けていただきました。

「故郷に恩返しをします」珍しく殊勝に言った言葉に、「そうか、苦労するよ」と微笑んでいただきました。その微笑の意味が分かったのは、県を早期退職し、故郷で講演会を開催し講師として来島していただいた時、素人集団が交通費等の謝礼として渡した寸志の倍の祝金をいただいた時でした。持つてきていただいた秘書の方が、「君ならやれると伝えておいてくれ」と伝言をいただいた時でした。本当の、「倍返し」でした。

生家

70年以上も前に父が建てた家は、今風



「門下市塾」の看板を掲げた居宅

の家だったのでリフォームは無理と言われ、母と姉、3人で過ごした思い出の詰まった家を解体しました。残したものは、庭の隅にあった楠木を切断したものと、井戸の復活のみ。家の中にあつたものは断捨離の優しさを通り越して破壊。どうやら、茶器や掛け軸など高価なものもあつたらしく、非難の視線は今も続いています。

一番きつい視線は、帰郷後、母の死後誰も住んでいなかった家を、とにかく、生活できるようにしようと、一緒に掃除をしてくれた方でした。「この家は良い。

まさに日本の家屋の文化の香りがする」と言っておられました。

解体後、何にもなくなつた家屋跡の現場に、言葉なく佇んでおられた後姿が印象的でした。が、それ以来、私が、「文化」の「ぶ」の字でも言おうものなら、呆れたような表情をされます。

いずれにせよ、父と母が息を引き取った家は、1階は誰もが使えるように、2階は私の居宅に生まれ変わりました。

イメージは、松下村塾。無頼派の友人が贈ってくれた屋久杉の看板、「門下市塾」を掲げ、門ミユキの表札の裏に、門康彦と書いて玄関を整えました。

私の趣味の一つに、掃除がありますが、父も母も逝つた生家で私も逝く確率は高く、何時もピカピカに努めています。台風の時でも喫煙は外でするのはもちろん、トイレは小便も全員座つてすることが



ゴルフを楽しむ筆者

ルールです。それでも広間の一カ所に煙草の焦げ跡があります。

「そのこだわりは何ですか？」と問われ、「凜として逝きたい」と答えたら、その人は何を勘違いしたのか、広間に、AEDを置いてくれました。

「淡路島三市時代の混乱の時、友人たちと取って火中の栗を拾う。他市とせめて肩を並べるために、不利な戦いを選択せざるを得ない。10年20年の時間を経ての評価となるだろう。我々の世代では時間が足りない。淡路市後継者育成塾として、生家に塾の拠点を建設する」(旅立ちの唄・門康彦web Site)

少年

志筑小学校1年生の通知簿の所見欄に、恩師から「潔癖すぎる」と論評されています。良くも悪くもそのまんまです。

悪さをしてその事を認めなかった子供の私を、母から脇差で、一緒に死のうと責められた事があります。本気で逃げました。短距離は今でも速いです。

雨の日、大学進学のため離島する私をバス停に送ってくれ、傘をさすのも忘れて、「何になつてもいいが、ヤクザだけにはなるな!」と涙声で言っていた母の姿が、私の原点にあります。

義理、人情、そして愛。忘れてはならない覚悟を、「心は少年」という言葉に託

して早、9年目。空手4段の武闘派の看板はストレス性腰痛に粉砕され、追い込まれるとプロよりも強いと言われたゴルフは、100ヤードを5番アイアンで打つようになり、クラブや老人会で涙を誘った歌声はかかれてしまいました。

少し弱気になりかけた最近、外人部隊に消えたはずの後輩から便りがありました。「先輩何をやってるんですか!」

「見ろ／あの暗闇に燃える火を／俺達の時代は終わっても／生きてある限り／あの火は消えない／俺達の火／決して汚れない／戦士の／雨に逆らう／高貴の／あれは俺達の火／消えることなき／自恃の火」(詩集・砂楼の伝説)

初心忘れることなく、「いつかきつと帰りたくなる街づくり」に市民と共に取り組んでみたいと覚悟を新たにしている天狼(アソンプレ歌謡祭)です。



アソンプレ歌謡祭に出演する筆者